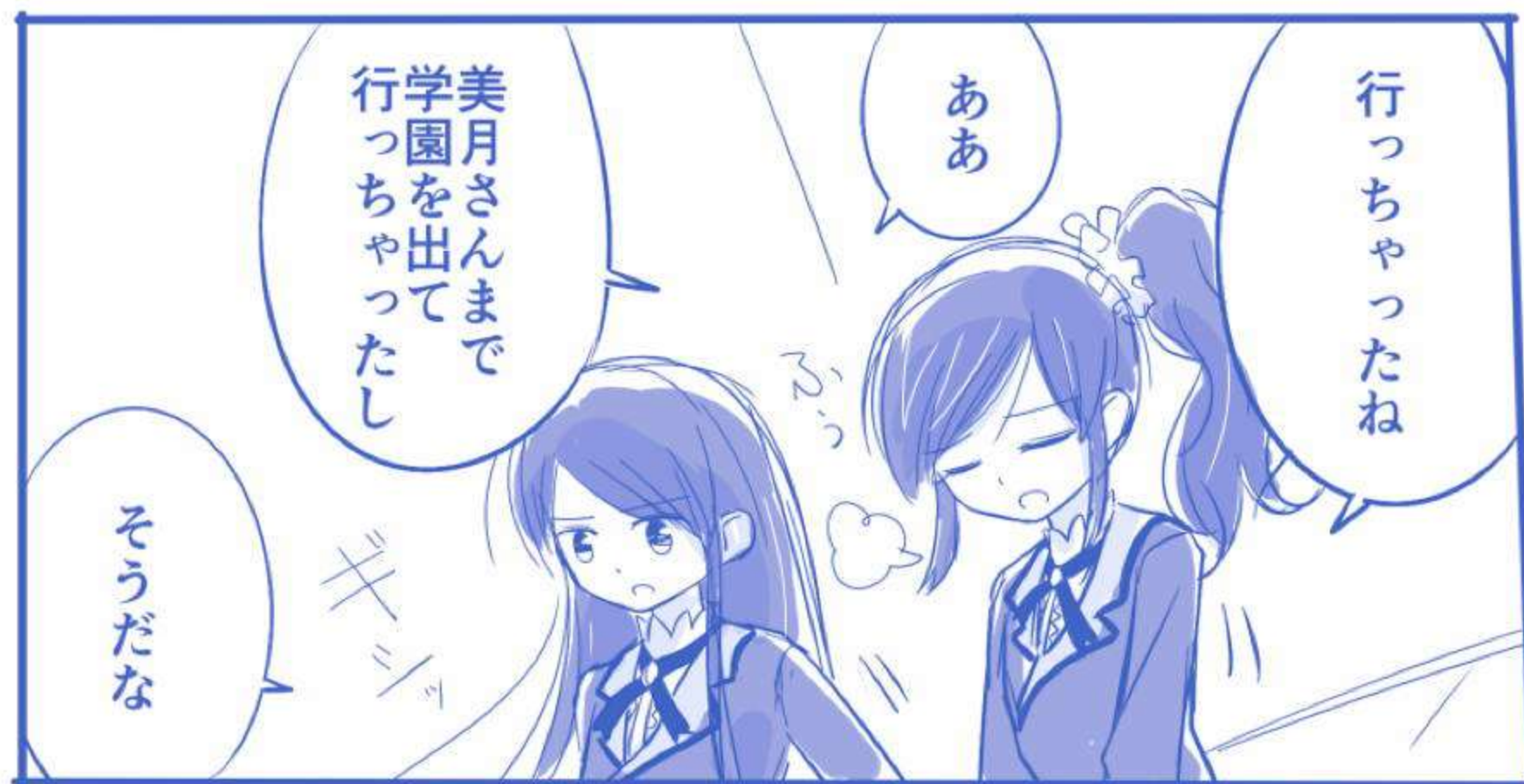


いちごが
アメリカに
出発した日



私は

あおいを
犯した





私達また
いちごに
驚かせ
られるんだよ



ワクワク
しない

そうだよ

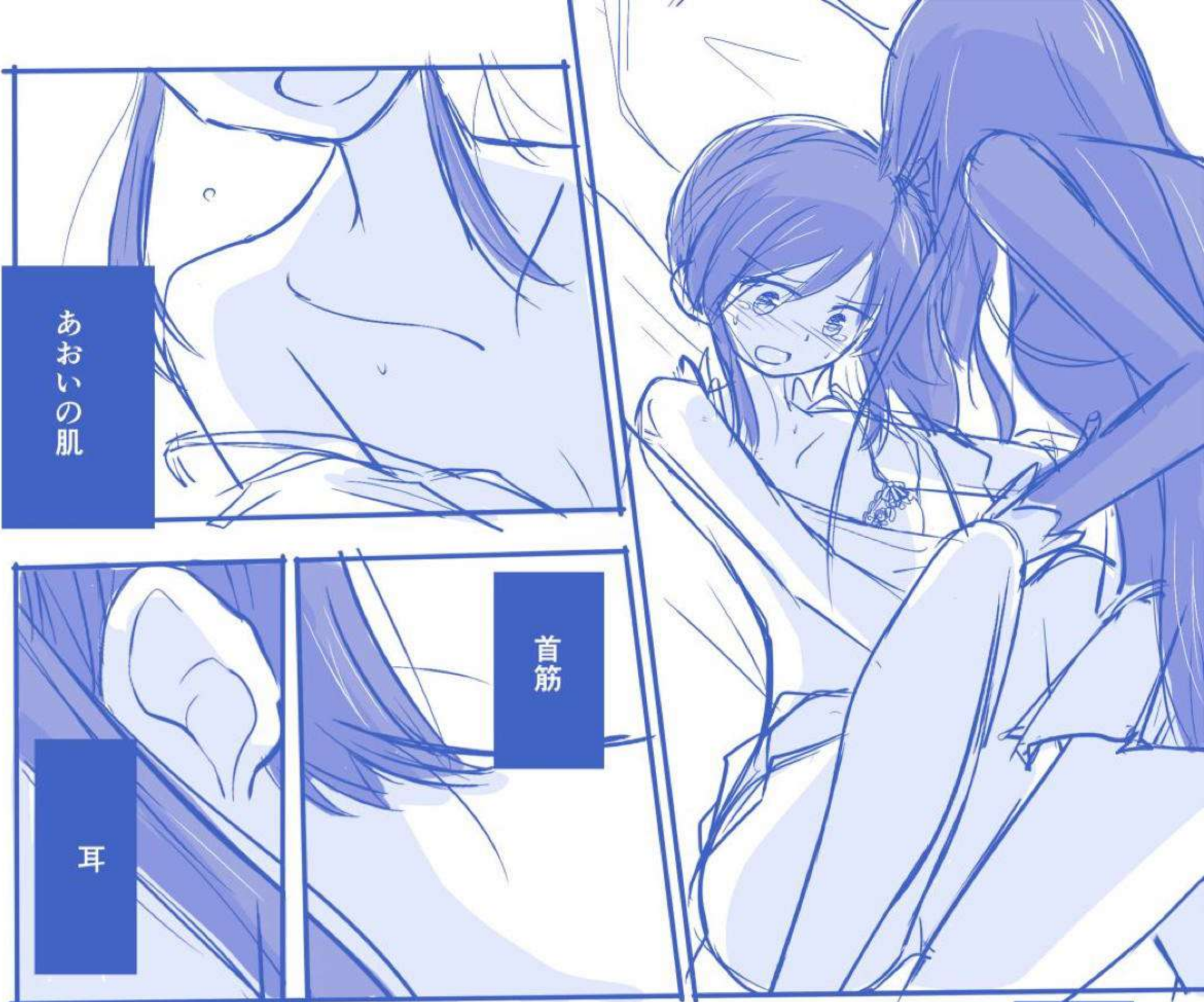
いちごは
ちゃんとは
あおいの事を

見ているのか

MIZUKI KANZAKI

いちごは
純粋で
悪気の無いのは
わかる

だからこそ
余計に
見てられない



あおいの肌

首筋

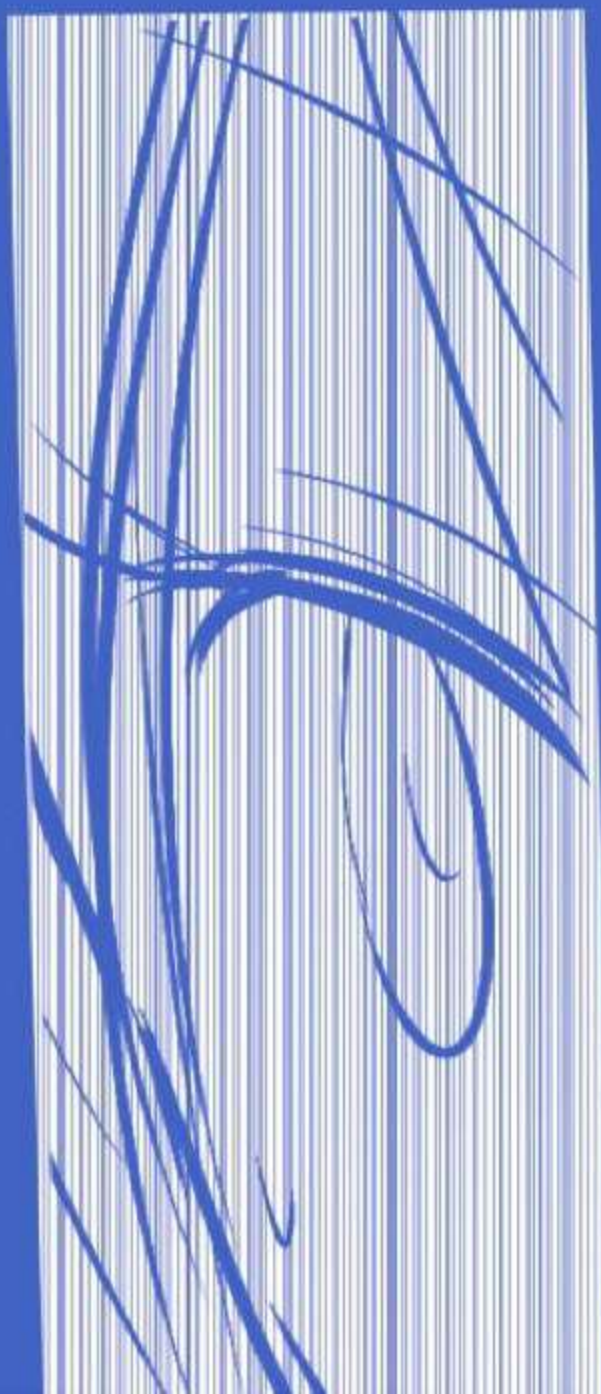
耳

唇目

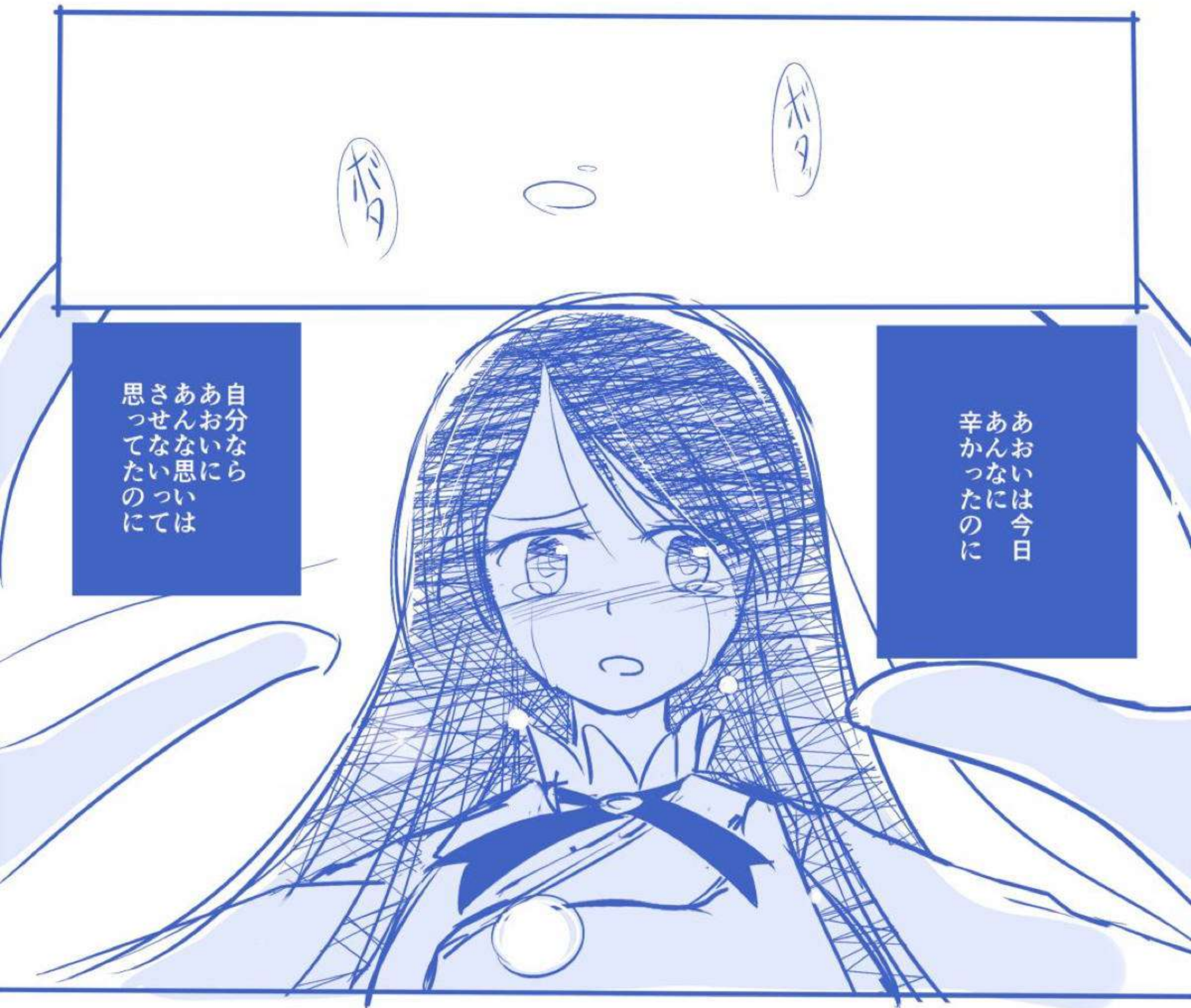
ずっと
愛おしかった

私のものに
したい





私は
何を
して
るんだ



自分なら
あおない
あんなに
さえない
思ったい
のては

あおいは今日
あんなに
辛かったのに

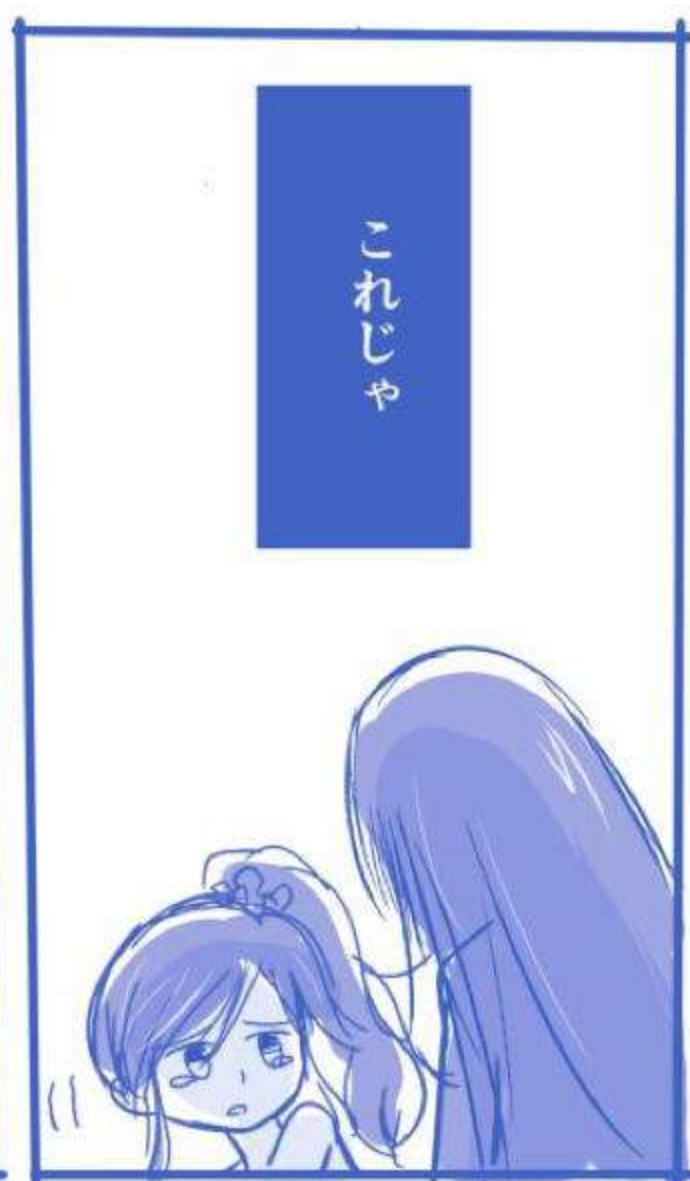


…ごめん



同じじゃ
ないか

ごめん…
あおい



これじゃ



うん
いいよ

私こそ
ごめんね



蘭の気持ちには
なんとなく
気が付いてた

でも
今まで
はぐらかして
きちゃって



さっきは
ちよっと
びっくり
しちゃって…

だから
泣かないで

—ああ

私も蘭の事が
好きだよ

そうやって
あおいは
また
全て
許すんだ—



許して
くれるのか

——うん

そのかわり
今度は

優しく
してね

きつと

これは

嘘

その日から

あおいとの
関係は
毎日続いた

どんなに
仕事で遅くても
朝が早くても

若さに任せて
毎日求め合った

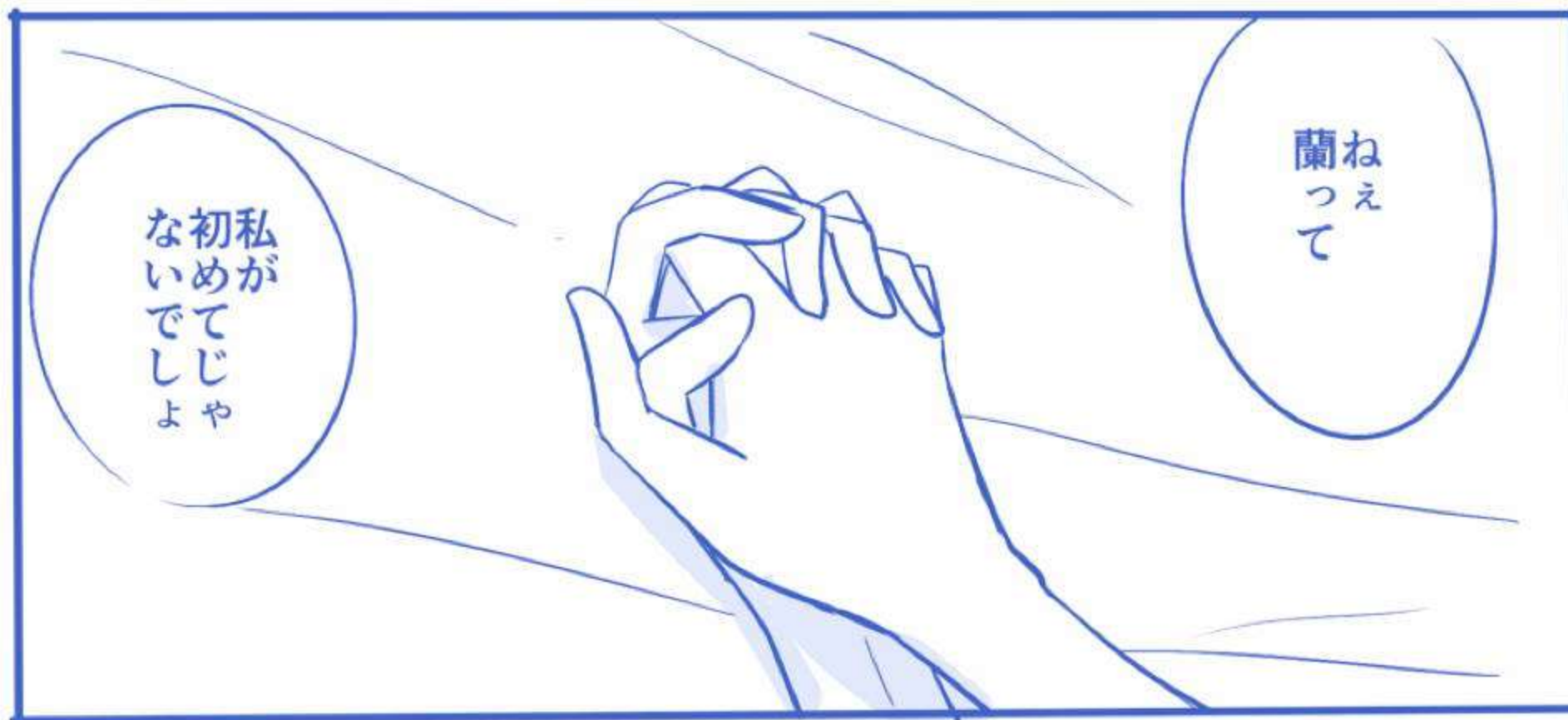
休みの日に
お互い部屋から
一歩も出ない時も
あるくらいだった





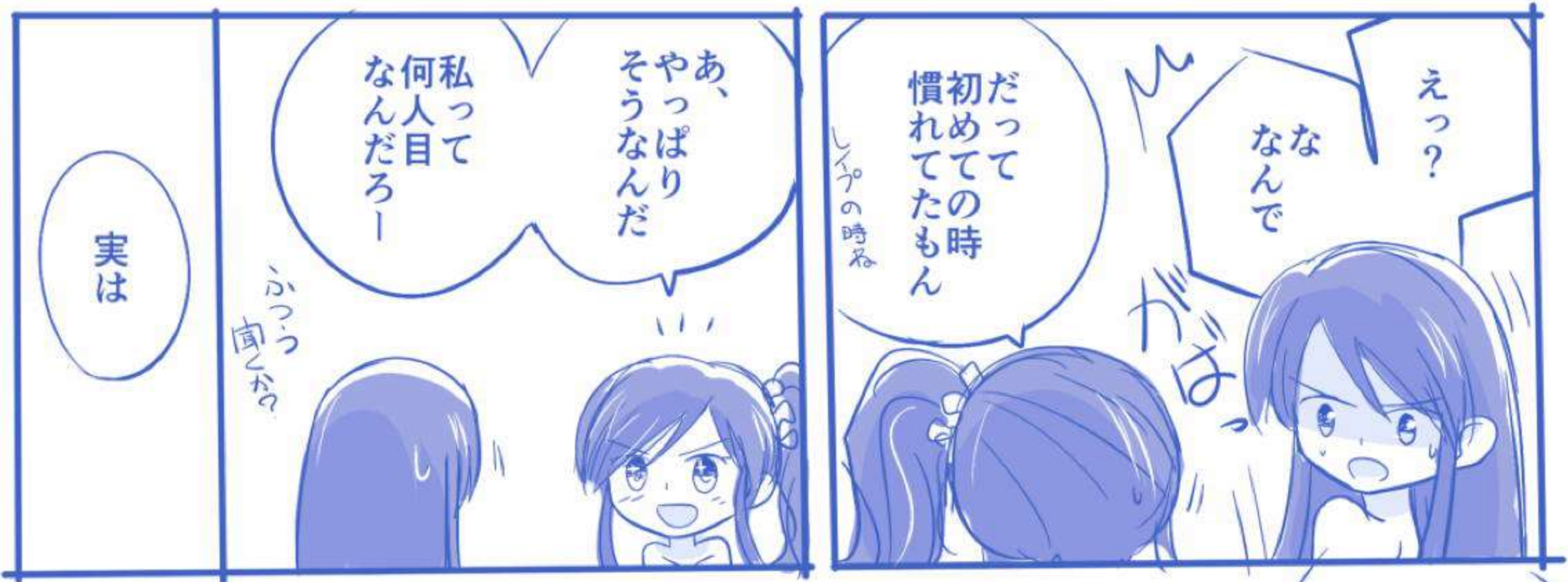
もう
あおいの身体は
私のもの
だったし

私の身体も
完全に
あおいのもの
だった



ねえ
蘭って

私が
初めて
じゃ
ない
でしょ



えっ？

なんで

だって
初めての
慣れた
もん

しゅわの
時名

あ、
やっぱ
りだ
そう
なんだ

私って
何人目
なんだ
ろー

こっつ
んか

実は



あ、
ごめん

もしかして
嫌な話
だった？

いや
じゃない
んだ



当時の
私は
喜んで
いて

むしろ
大人の
女性に
好きに
誘われ
る快感
で
自分か
ら気が
する
行



子役時代
の先輩達
に
いろいろ
されて

はじめて
女の子
のとき
かな

自分から
あてがうのは
あめが
なんだが

その頃の
せいのなか
昔からの女
性的な事を
考えられない
しか

私や
いちこの事も？

ああ、

最初の頃は
仲が良くなり
過ぎると
2人の事を
そういう目で
見てしまいそう
で恐かった

実際
あおいの事は
好きすぎて
我慢できなくて
襲ってしまったし

そうですね
まったくー

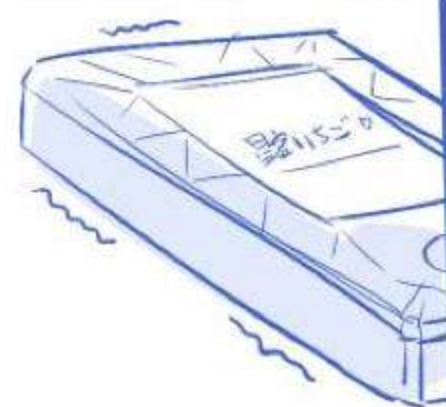
ごめん

あおいはる

いつ頃ー

あ、
ゴメン
電話

いちご
からだ





うん
仲良く
やってるよ

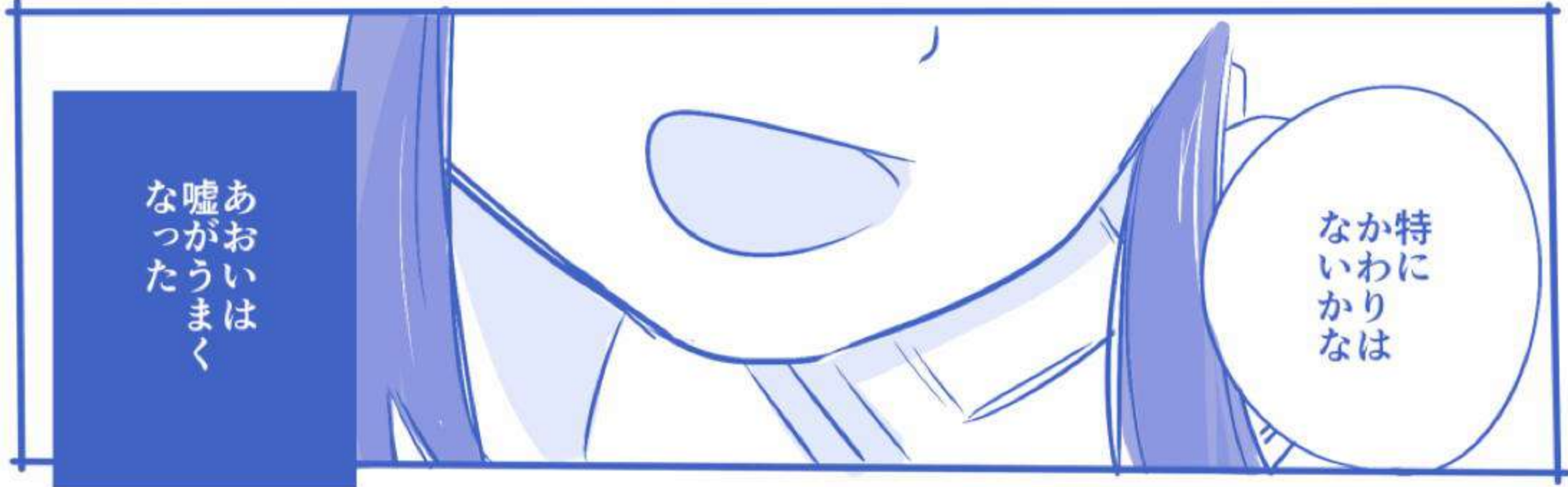


うん
うん

うん
特には

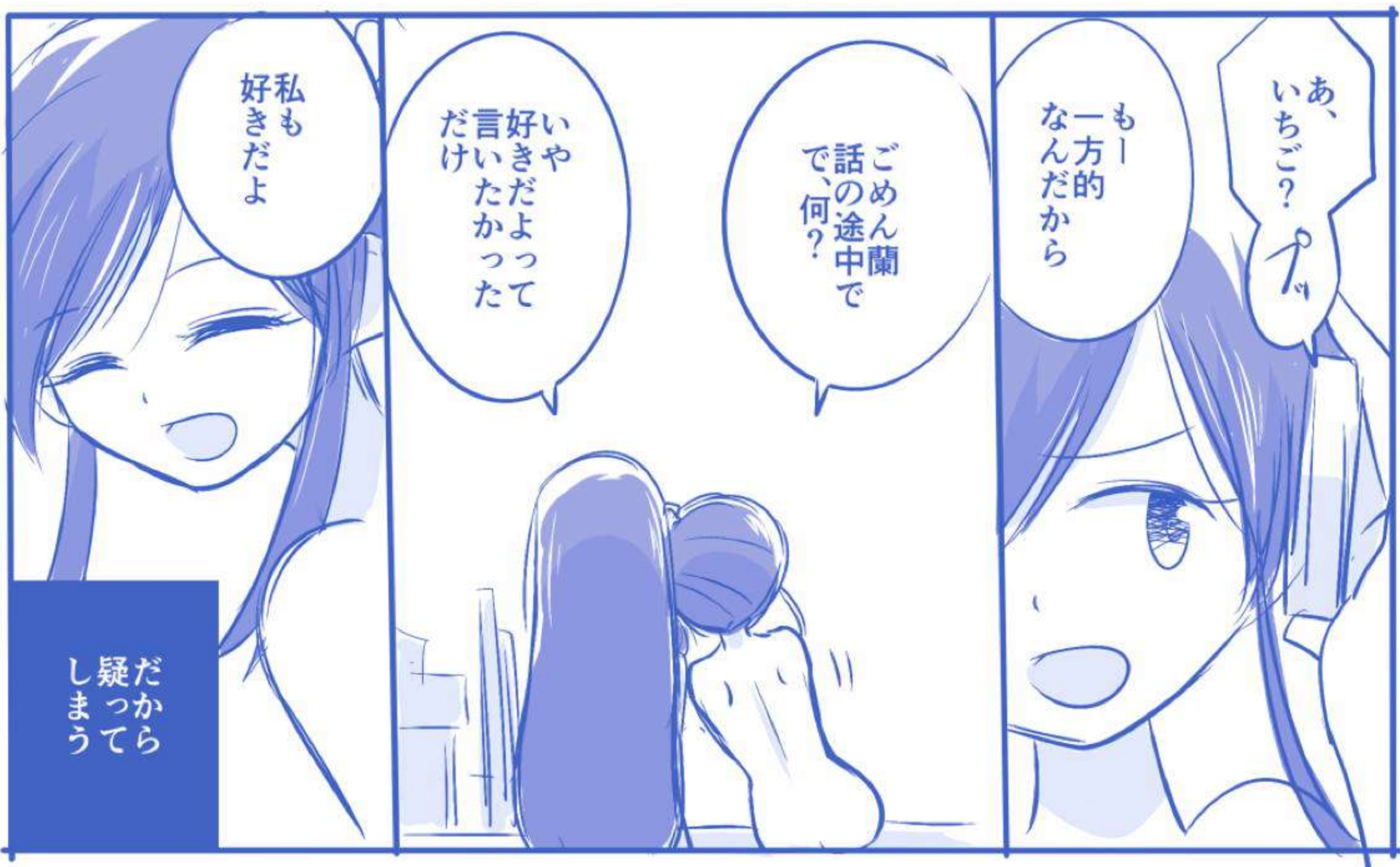
えー
見てみた
かったなー

蘭ん？



特に
かわり
ないか

あおい
はく
な
う
ま
く
な
っ
た



私も
好きだよ

いや
好きだよ
だった
だけ

ごめん
蘭で
話の
途中
で、
何？

もー
一方的
だから

あ、
いちご？

だから
疑って
しまう

それでね蘭
今の電話でも
そうだけど
スターライトの
みんなにも…

私達が
つきあってる
事は…

わかってる

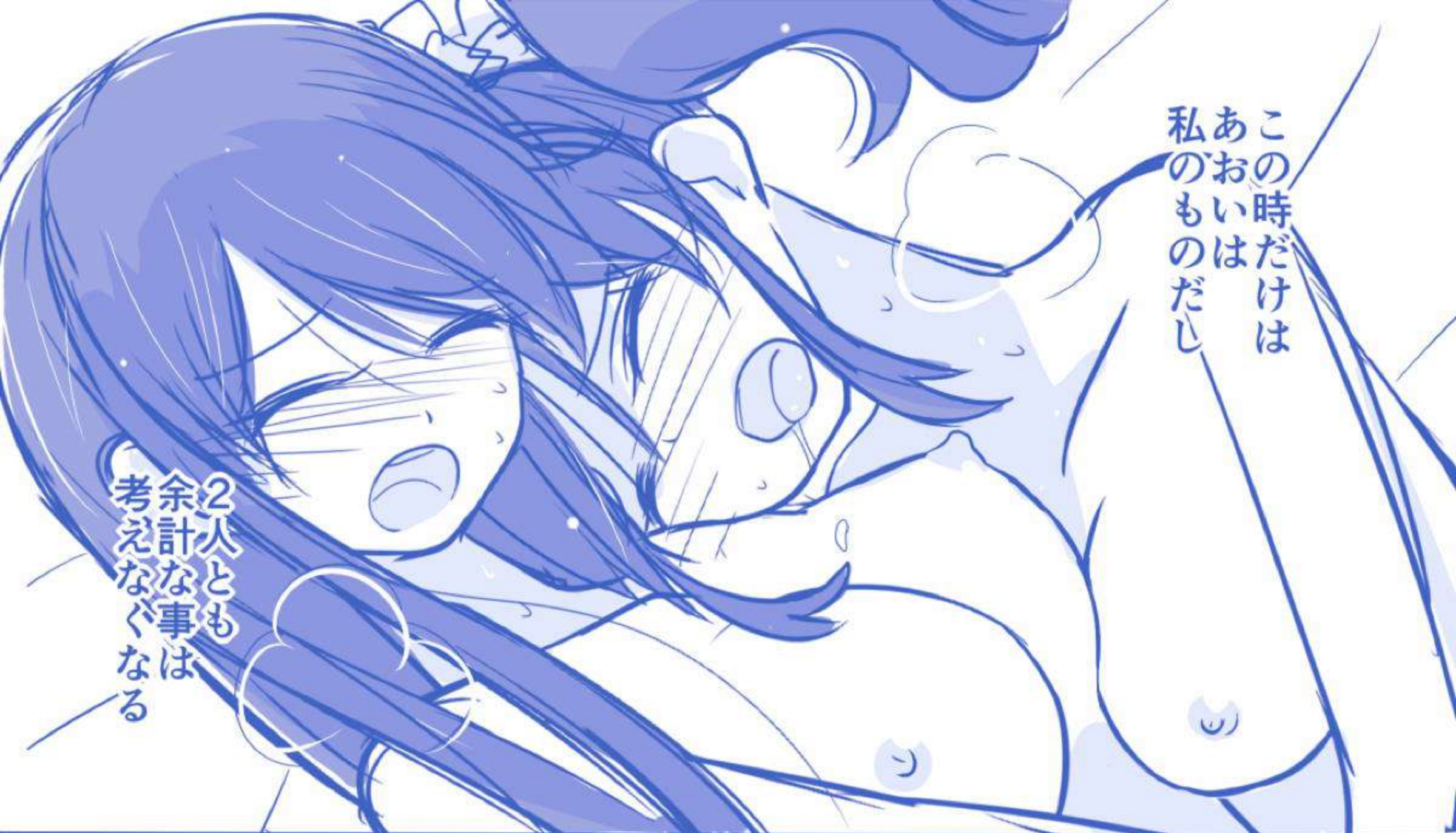
んっ

聞きたくない

寝言で
何度も聞いた
「いちご」
という言葉

抱いてる時の
あおいは
その言葉を
言わない

心の中で
呼んでいと
しても



この時だけは
あおいは
私のものだし

2人とも
余計な事は
考えなくなる



どうしたの？

.....



いや
別に

また
痩せたな

それでも
頭をよぎる

私と
あおいは

つき合うべきでは
なかったかも
しれないと
いう事



でも

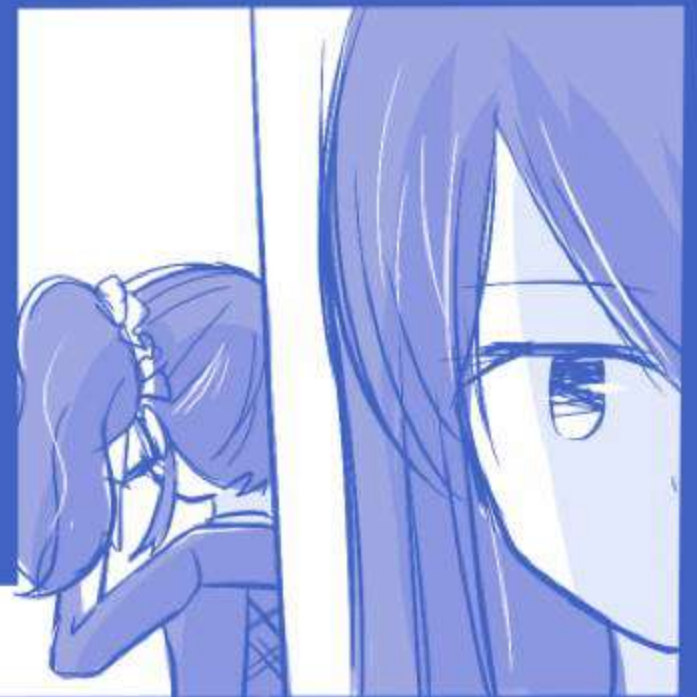
もう

戻れない



人には
見せず

お互いを
見ず



身体だけは
重ねて



擦り切れて
いくような
毎日

いちごという
要をなくした
私たち2人は



ただ

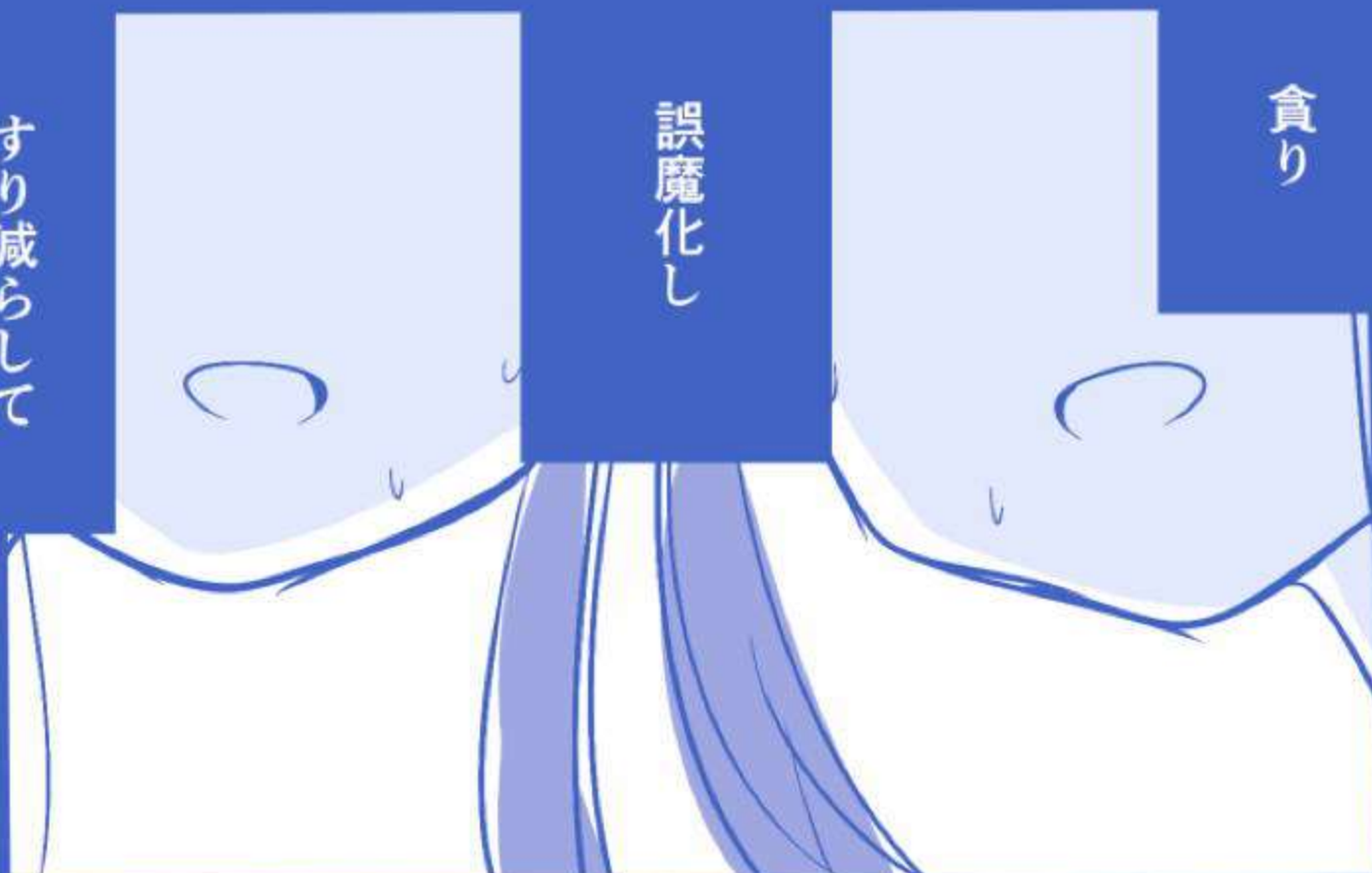


貪り

誤魔化し

すり減らして
行くだけ

息苦しい



こんな
愛してるのに

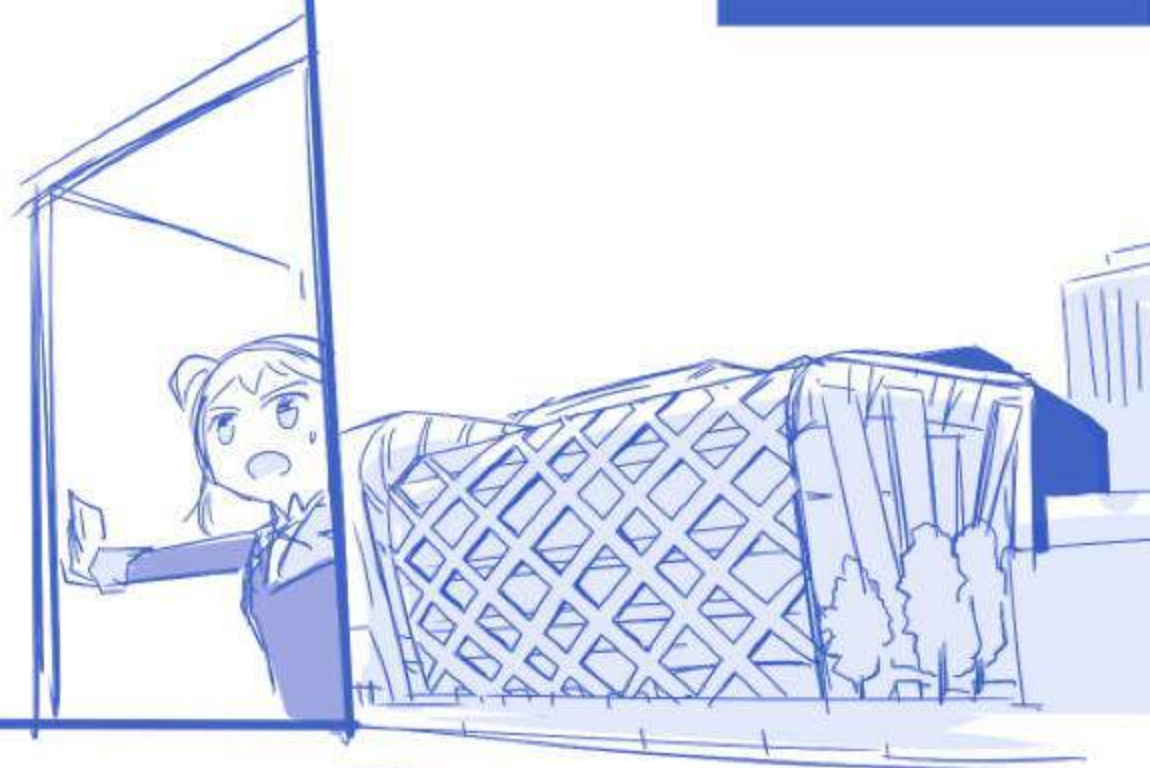
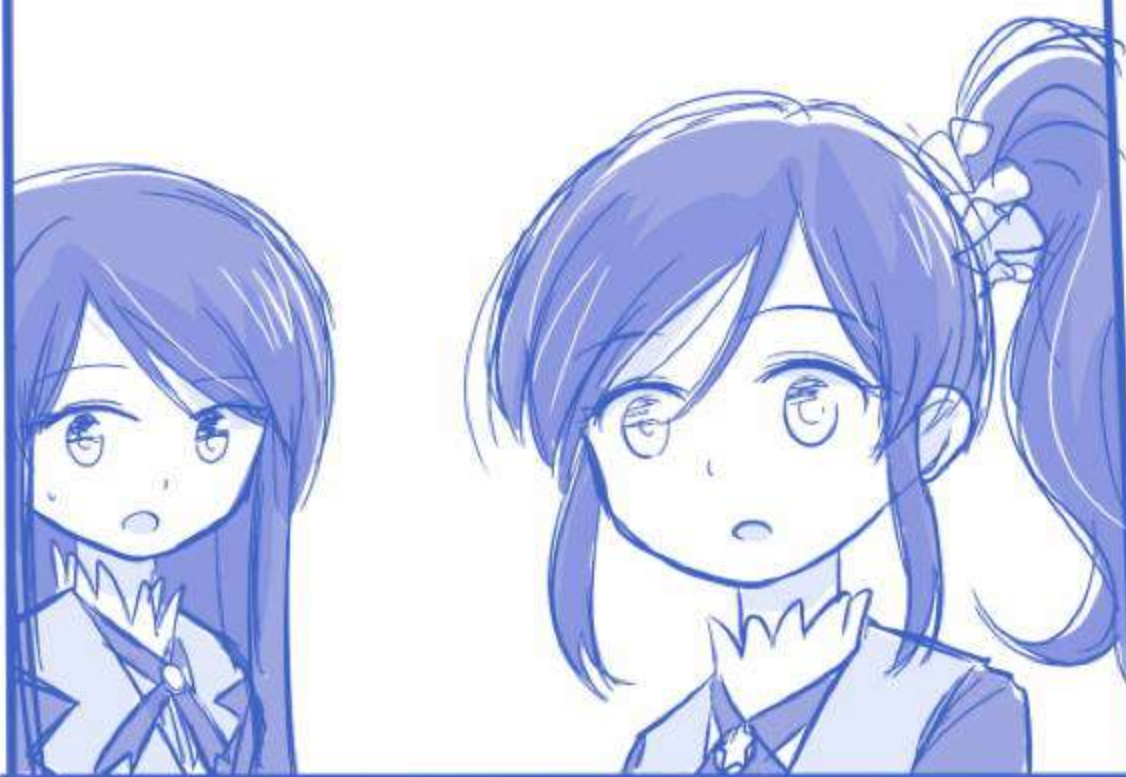
愛されて
いるのに



息苦しい

—そして

この悪夢の
幸せな現実が—



ただいま

—やっど

あおい
蘭

終わる—